

第176回 Brown Bag Lunch Seminar 報告書

テーマ：TICAD IV の成果と今後の展望

講師：木寺 昌人 氏／外務省アフリカ審議官

日時：6月30日（月） 開場 12:00 講演 12:30 – 14:00

今回の BBL セミナーでは、外務省アフリカ審議官の木寺昌人氏をお招きし、1 ヶ月前に横浜で開催された第4回アフリカ開発会議（TICAD IV）の成果と、北海道洞爺湖サミットでも主要な議題の一つである今後のアフリカにおける開発及び対アフリカ支援について、TICAD IV の舞台裏でのエピソードなども交えながらご講演いただいた。

「元気なアフリカ」を目指して

日本政府が、国連や世界銀行との共催で開催しているアフリカ開発会議（TICAD）は、冷戦終結後に国際社会のアフリカへの関心が薄れつつあった1993年に、第1回目の会議が開かれた。今回の TICAD IV では「元気なアフリカを目指して – 希望と機会の大陸」という基本メッセージのもと、①経済成長の加速化、②人間の安全保障の確立、③環境・気候変動問題への対処を重点事項として、アフリカの開発の方向性について活発な議論が行われた。

① 経済成長の加速化

21世紀に入ってから、アフリカの経済は好調であり、2007年の経済成長率をアフリカ全体で均すと、5.9%に上る。これは、資源価格の高騰が、アフリカの輸出にプラスの影響を及ぼしていることに起因すると考えられる。この経済成長を加速化するために、さらに貿易・投資をしていく必要がある。

② 人間の安全保障の確立

1) 平和の定着

1980年、90年代にアフリカ各地で内戦・紛争が勃発し、ルワンダやブルンジでは悲惨な虐殺も行われたが、現在それらの国々でも平和が定着しつつあり、国家建設が進んでいる。その一方で、未だ年間50～60億ドルの国連予算（日本の分担率はその16.6%）が当てられているPKOの75%がアフリカに使われているという現状がある。また、ダルフル紛争など、アフリカでは未解決の問題も残っているが、平和が進み平和が定着することで、それらの資金を国家建設やインフラなどの平和目的のためにより有効に使うことができるようになるため、この流れを助長していくことが必要である。

2) ミレニアム開発目標（MDGs）

アフリカには、感染症、保健衛生、教育、貧困撲滅、安全な水へのアクセスなど、根強く残っている問題が多々あり、2000年に設定されたMDGsのなかに、2015年までに解決されるべき問題として挙げられている。今年はその中間年にあたるが、特にサブサハラ・アフリカにおいては多くの項目について悲観的な見方がされている。

TICAD では、こうしたアフリカの諸問題にも光をあて、支援していくべきだということを取り上げられている。

③ 環境・気候変動問題への対処

日本としては、2013年以降の気候変動問題に対する枠組みの議論に、アフリカを含めた全ての国に参加してほしいと考えている。アフリカからは、自分たちは最も地球を汚していないが、最も気候変動の影響を受けているという主張がよく聞かれるが、最も影響を受けている国々として、ぜひ気候変動問題への対処を議論する国際会議に積極的に参加してほしいと考えている。福田総理が、気候変動問題への取り組みのイニシアティブとして「クールアース・パートナーシップ」を発表し、そのなかで今後5年間に途上国の気候変動に対する適応策を支援するために100億ドルを投資するという意思を表明した。それらを通じてアフリカの環境・気候変動問題への関心を高めていくことが大切である。

TICAD IVまでの道のり

TICAD IVの準備過程において最も重点を置いたのが、アフリカのパートナーを信頼し、彼らの悩み、問題意識、希望などをよく聞くということであった。特にアフリカの駐日大使の話聞き、彼らのために自分のオフィスのドアは常に開いているということを強調してきた。このようなアプローチは、アフリカにとってこれまであまりなかったもので、例えば旧宗主国であり、歴史的な問題を抱えているヨーロッパのアフリカ支援は、チャリティー（慈善）という形で行われ、心がストレートにつながっていないことも多い。それに対して、今回のTICAD IVで最大の参加者数、41名の首脳級の参加を確保できたことは、TICADプロセスにおける日本的なやり方がアフリカの信頼を勝ち得た結果ではないかと思っている。

TICAD IVにおける議題を決める際にも、アフリカで2回の準備会合を開き、アフリカと議論しながら決められた。アフリカからのTICAD IV参加者と会談する中で、中国・インドで行われたアフリカに関する会議では日本が行っているようなアフリカを聞く準備プロセスがないという意見も聞かれたが、日本のTICADにはその点十分比較優位があると思われる。

TICAD IVでは、福田総理が全体議長を務め、日本の対アフリカ支援策として、対アフリカODAの倍増と対アフリカの民間投資の倍増支援などを打ち出した。TICAD IVと並行して、福田総理は、アフリカの首脳や個人参加者47名と個別会談を実施し、これはアフリカ側にとってもよかったと思う。福田総理が会談で不在の間は、現職の首相として初めてアフリカを訪問した森・元総理が全体会議をとり進めた。

なぜ今アフリカか？

アフリカにおける開発は、2000年の沖縄サミットを皮切りに、G8サミットにおいて常に取り上げられているテーマであり、今や国際社会共通の課題として位置づけられている。日本にとってアフリカ支援の重要性に関して、大きく次の3つの理由が挙げられる。

① 世界の主要国としてのリーダーシップ

日本が主要国の一角を占めるという自負心があるのであれば、‘regional power’でなく‘global power’であるということを世界に示すためにも、国際的課題であるアフリカの開発において日本がリーダーシップを発揮していくことは重要である。

② 外交における重要性

アフリカは、国連加盟国 192 カ国のうち、1/4 以上の 52 カ国を占めていることから、日本が国際社会においてリーダーシップを発揮する際にアフリカの応援は不可欠である。日本の国連安全保障理事会の常任理事国入りを考える上でも、アフリカは大変重要である。

③ 経済的重要性

アフリカは 10 億人弱が住む将来的に有望な市場であり、石油を始め豊富な資源を持っている。その意味でも、日本はアフリカと長期的視点に基づいた関係を築いていくことが重要である。

以上が、なぜ今アフリカ開発か、という問いへの応えであるが、国民にそれを説明するのは決して容易なことではない。アフリカに関心を持つ人々が、周囲の人にアフリカについて何と語りかけるかが大切であり、また、テレビなどの映像を通してアフリカについて考えることが、連帯感やアクションを起こすことへとつながり、ひいては ODA を使ったアフリカ支援への支持につながるのではないかと思う。また、日本は途上国から先進国入りを果たした「元気のいい国」であり、先進国のなかでも技術や経済でリードしているというプラスのイメージをアフリカの首脳からもたれているということも言い添えたい。

TICAD IV – 「歴史的会議」

TICAD IV は、その規模、参加レベル及び新たに打ち出した開発の考え方において歴史的会議であったといえる。

① 規模

TICAD IV にはアフリカ 52 カ国のうち、チャド以外の 51 カ国からの参加があった。ピン AU 委員長を含む 41 名の首脳級の参加があり、全体としての参加者数は 3000 人に上った。報道陣も日本から 800 人、海外から 500 人の参加があった。発行した ID カードは約 7000 枚に上る。

② 主要議題

アフリカの開発において、経済成長の加速化に焦点が置かれたことに関しても、今回の TICAD は歴史的であったといえる。マクロ経済を良くして途上国の開発に貢献するというのは、日本がすでに東南アジアで実践したことであるが、アフリカにおいては非常に新しい発想であるといえる。アフリカ支援においては、これまで、人間として基礎的な需要（‘Basic human needs’）や貧困撲滅など、「現象面」に対応していくという考え方が主流であり、経済成長が公式の考え方として採用されたのは今回の TICAD が初め

てであった。

実際に、アフリカの首脳にとって「工業化」というのは最も関心のあるトピックであり、外国企業からの投資を強く望んでいる。TICAD IV ではこういう側面も念頭に置き、21世紀を「アフリカ成長の世紀」にするため、アフリカ経済の離陸も念頭にマクロ経済を後押しするという考え方を取り入れたというのは歴史的である。

TICAD IVの成果

TICAD IV の成果は、「横浜宣言」、TICAD プロセスの下で今後5年間に取られるべき具体的措置を示した「横浜行動計画」、履行状況のモニタリングとしての機能を果たす「TICAD フォローアップ・メカニズム」などの文書としてまとめられた。「横浜行動計画」には、日本、EU、世界銀行他の国際機関が、今後5年間に何をするか、ベトナムやタイなどのアジア諸国のアフリカ支援策も掲載されている。

日本の支援策としては、対アフリカ ODA の倍増が掲げられ、経済成長の加速化、人間の安全保障の確立、環境・気候変動問題への対処の3つの議題に対応した、以下のような支援分野があげられている。

- インフラ整備（道路・電力）
- 農業・食料（緊急食料援助＋中・長期的な農業の生産性向上）
- 貿易・投資の促進
- コミュニティ開発
- 教育と人材育成
- 保健・医療
- アフリカの水開発
- クールアース・パートナーシップ

農業・食料分野での支援については、アフリカでは住民の3分の2が農業に従事していることから、農業の生産性向上はアフリカを豊かにすることに直接結びつくと考えられている。また食料価格が高騰している現在、特に米の生産量の倍増に注目が集まっている。

貿易・投資の促進に関しては、三菱商事がモザンビークに建設したアルミニウム工場が成功を収め、同国の経済成長に大きく寄与していることから期待が集まっている。アフリカへの投資が増えるよう、JBICに基金の創設が計画されており、また、TICAD IV 開催前の民間企業との対話において、民間がアフリカに投資する際のリスクとコストが問題となったことから、その解決策として官民連携が求められている。例えば、民間が工場を建設し、ODAで道路や港を作るなど、ODAを通じて民間のリスク及びコストを些かなりとも減らしていく努力が求められている。

TICAD IVの評価と今後の展望

1) TICAD IVの評価

TICAD IV の直接の責任者として、TICAD IV が成功であったかということについて個人的なコメントをすることは手前味噌で適当ではないと思うが、関係者・参加者及び周囲からは概ね良い評価を得られた。

- アフリカ首脳の評価

予定通りことが進んだことに対し、日本のリーダーシップに対する高い評価があった。横浜宣言、行動計画、フォローアップ・メカニズムについても、アフリカの意見が反映されているとして歓迎された。福田総理の表明したアフリカ支援への日本のコミットメント及び個別会談に対しても好意的な評価が得られ、G8 サミットへの期待が寄せられた。

- 日本の関係者からの評価

福田総理は、アフリカ首脳ら47名との個別会談など、非常にハードなスケジュールにも関わらず、積極的な姿勢で臨み満足していたようである。特に、TICAD IV 直後にローマで開催された食料価格高騰に関するサミットに、アフリカの意見を十分聞いた上で参加できてよかったと述べていた。福田総理はアフリカ首脳との個別会談で、言うべきことは押さえた上で相手の意見を尊重し、TICAD IV 開催1日目にアフリカ首脳から「TICAD の成功おめでとう」と言われた際には、「いや、それはアフリカが変わったからですよ」というなかなか奥の深い回答をしていた。野口英世賞授賞式や宮中お茶会などの行事も含め、全てが順調にいったことに他の関係者からも安堵の声が上がった。

- 周囲からの評価

サルコジ仏大統領を始め他の先進国や、アジア諸国、国際機関からも好意的な評価を得られた。特に、TICAD IV 開催に際して多大なる協力を得た世界銀行のゼーリック総裁からも大変良い評価をいただいた。国内外のマスコミからも大きく取り上げられ、好意的に、またフェアに報道してくれた。

2) 今後の展望

洞爺湖サミットにおいては、7月7日にG8首脳と8名のアフリカ首脳(ナイジェリア、アルジェリア、セネガル、ガーナ、タンザニア、南アフリカ、エチオピアの首脳及びピンAU委員長)が、昼食と午後の時間を使ってアウトリーチ・セッションを行い、その翌日にはG8首脳間でアフリカに関する議論が行われることになっている。中心となる議題としては、気候変動問題や食料価格高騰の問題、ミレニアム開発目標(MDGs)などが考えられるが、G8欧米諸国もアフリカへの経済支援の重要性を認識しており、G8として意見を収斂していくことはそう難しいことではないと思われる。

洞爺湖サミット後にも9月に、援助効率向上に関するアクラ・ハイレベル・フォーラム、アフリカの開発ニーズに関するハイレベル会合、MDGsハイレベル会合の3つのハイレベル会合が開催されるが、ここでもTICAD IVの成果がつながっていくものと考えられる。

今年1月にアフリカ審議官に就任して以来、TICAD IVプロセスに携わるなかで、議員、関係省庁、援助機関やNGOのアフリカに対する大きな情熱を強く実感した。5~10年前まではアフリカは遠い国と感じていた民間企業も、現在ではアフリカに対してピンポイントで明確な関心を示すようになった。アフリカ自身も、強い関心を持って議論に参加してく

れている。TICAD のように、関係者全体が会議の成功という一つの目標に向かって進んでいくような仕事は、外務省の中でも比較的稀であり、TICAD IV はインパクトがあったのではないかと思う。今回の TICAD IV での成果を踏まえ、今後広い視野を持って色々な可能性を追求しながら、一緒に絵を描くつもりで、援助関係機関、民間企業や国際機関等と協力してアフリカ支援を行って参りたい。